

ハイス。同期の溺愛予告は躲けません

プロローグ

【あのみ】

【さんま】

【マジで話があるんだけど】

【土星】

【今のは、どうぞ、のところでろ】

【ロケット】

長かった夏がようやく終わりを迎えようとしている九月の終わり。メッセージアプリの画面に、ポコポコと交互に吹き出しが表示される。

佐倉莉子は自宅のベッドで寝転びながら、送られてきたメッセージに対し高速で無意味な単語を返していく。間が空いてしまうと向こうのペースで会話が進んでしまうため、自分の都合の悪い話を聞きたくないのなら話させないに限る。

- 【とにかく話がしたい】
- 【いくら】
- 【来週の水曜、時間取れない？】
- 【イカ】
- 【帰り一緒に飯食おう】
- 【ウニ】
- 【逃げるなよ】

けれど、その攻防も無意味に終わる。ノー残業デーである水曜日の今日、この彼も出席していた半年ぶりの同期会をこつそり抜け出してきたというのに、強引に話をする約束を取りつけられてしまった。

勝手にしりとりを始め無意味な単語を送りつける莉子に対し、律儀にルールを守りながら会話を強行してきた彼の根気強さに呆れると同時に、うまく繋がっているメッセージに笑いが込み上げる。これ以上会話を続けたくなくて【ようかん】と送ると、【勝った】という文字。

「ふふっ、子どもみたい」

こういうところが好きだなあと思う。クールでポーカーフェイスな彼にも、意外と負けず嫌いで子どもっぽい一面があるのだ。

じつと画面を眺めていると、続けてドヤ顔をしたパンダのスタンプが送られてきた。

「……なにこのパンダ。初めて見た」

タップして全種類のスタンプを見てみると、二頭身のすつとぼけた顔のパンダがずらりと並んでいる。可愛いような、イラッとするような、絶妙なイラストだ。

「でもこのドヤ顔は、明らかにバカにしているよね？」

次に会ったら本人に不満をぶつけようと思つて、スマホを横にぼいと放る。

このくだらないやりとりをしていた相手は、水瀬蓮^{みなせれん}。

莉子が勤める水瀬ハウス工業に同期として入社した男で、名前から察せられる通り、この会社の創業者一族、いわゆる水瀬帝国の御曹司^{おんそうし}だ。副社長の息子であり、社長の甥^{おい}でもある。

そんな蓮は今日、莉子に「とある話」をしようとしていた——と思う。

じつと観察するような眼差しで見つめられ、野生の勘が働いた。これは逃げた方がいいと。

優しいけれど、莉子を拘束する蓮の視線。動けるうちに、捕らわれないうちに、早くここから去らなくては。逃げ遅れれば、きつと頭からがぶりと食べられてしまう。

そんな自分の直感に従って同期会を途中で抜け出してきたのだけれど、そのせいで帰宅後にこんなメッセージのやり取りをする羽目になってしまった。

——聞きたくないって、水瀬だってわかってるはずなのに。

この半年ほど、その話を切り出させまいとあの手この手を使って躲^かし続けている。気分はさながら華麗なるマタドールだ。彼の真剣な雰囲気を感じてはひらりと避け、何事もなかったかのように振る舞う。なんとも不毛な追いかけっこだ。

今日は敵前逃亡のようになってしまったけれど、それも致し方ない。戦略的撤退である。なにをそこまで避けているのかといえば……彼から想いを告げられること。

莉子は蓮からの告白を、なんとしても躲したいのだ。

第一章 水瀬帝国の二人の王子

水瀬ハウス工業は、建築事業と都市開発事業を二本の柱としている。

建築事業の中でも住宅系と建築系に分かれ、住宅系はその名の通り戸建てやマンションなどの企画、設計、施工、販売を担っている。

一方の建築系は商業施設や医療施設、法人施設の企画や設計、施工からリフォームまで行っており、莉子は建築事業部の営業課に所属している。水瀬ハウスのゼネコン部隊とも言われており、一日中歩き回って営業をかけ、不動産会社や金融機関を回って情報を交換したり、担当した現場へ行き進捗状況の確認をしたり、施主を訪問してアフターケアに努めたりと、なんともハードな部署だ。人と会う仕事だけに、忙しいからと身だしなみに手を抜くわけにはいかない。毎朝、家を出る一時間半前には起きてしっかりとメイクをしている。

最近パッケージに惹かれて買った新作のリップに合わせて、目元やチークは少し控えめに色を乗せる。

社会人も五年目。二十七歳になるのに未だ新卒のような扱いをされるのは、業種的に年配の男性が多いせいなのか、単に莉子が童顔なせいなのか。少しでも年相応に見られるように、アイライン

を休日よりもくつきりと引くのが莉子のオフィスタイルだ。

チヨコレートブラウンに染めたセミロングの髪を毛先だけ巻き、耳より少し高い位置で無造作にひとつ結びをしてトップを引き出す。

九月下旬にしては少し肌寒い今日は薄手のジャケットを羽織ろうと決め、インナーには合わせやすい七分袖の白いブラウスに、グレーの細身なテーパードパンツを合わせた。

玄関の姿見で全身を確認した後、デザインよりも履き心地を重視したシンプルな黒いパンプスを履いて家を出た。

マンションから最寄りの駅までは、どれだけ早足で歩いても十五分はかかる。夏の暑い日や、冬の冷たい雪の日、オールシーズン雨の日など、家選びを失敗したと感じる日は少なくない。それでも莉子が払える賃料で築浅、三階以上でオートロック、さらにトイレとバスは別で洗面所も必須と欲張った条件を満たすには、朝晩往復三十分以上歩く以外に方法はなかった。

随分前の同期会でその話をしたら、なぜかげんなりした顔の蓮が眉間に皺を寄せていたのを思い出す。

駅から家までの間にコンビニはあるのか、終電まで人通りはあるのか、街灯はついているのかなど、矢継ぎ早に質問を投げかけてきたその様子は、まるで箱入り娘の初めての一人暮らしを心配する父親のようだった。

そんな莉子と蓮のやり取りを見て、同期の橋本^{はしもと}が笑った。

『水瀬ってクールなくせに佐倉には構うよな』

橋本は住宅営業課に所属しており、憎めない明るいい人柄と要領のよさで営業成績は悪くないらしい。建築と住宅で商材は違えど、同じ営業職として色々と話しやすい相手だ。

ニヤニヤと意味深な笑みを浮かべる橋本に、蓮は淡々と返す。

『放つとくと、とんでもないことしでかしそうだな』

『ああ。まあ、確かに』

『ちよつと。失礼じゃない？』

『佐倉もさあ、他の女子なら水瀬に構われたらもつと嬉しそうにするとと思うのに。お前は全然だよな』橋本の言いたいことはわかる。蓮は誰にでも笑顔で優しく接するというタイプではなく、どちらかといえばとつつきにくい雰囲気がある。雰囲気があるというだけで、実際は意外なほど面倒見のいい性格をしているのだけだ。

そんな蓮の中身を知らず、見かけやスペックだけでキヤーキヤー言っている女の子たちなら、ちよつと心配をされただけでも嬉しく感じるのかもしれない。

とはいえ当時の莉子にとつては、単なる過保護な同期でしかなかった。

『構い方がお父さんみたいなんだよね。子どもじゃあるまいし、十五分くらい歩けるよ』

『アホか。子どもじゃないから言ってるんだろ』

『もう何年も住んでるんだから今さらでしょ。慣れればなんてことない距離だよ』

ぼんぼんと言いかう莉子と蓮に、橋本はケラケラと笑う。

『あはは！ 佐倉にかかれば水瀬も過保護なオヤジだよ』

『誰がオヤジだ』

蓮は不貞腐れながらも律儀にツツコミを入れ、最終的にはひと言『せめて自転車買えよ』と渋い顔をして呟いた。

それもいかと検討はしてみたものの結局、歩くのも嫌になるほどの雨の日は自転車を使えないのと、駅の月極の駐輪場代だってバカにならないため、この自転車購入案は脳内会議の結果、満場一致で否決されたのだった。

「おはようございます、莉子先輩」

週の半分を過ぎた木曜日の朝。デスクに着いてお気に入りのココアを飲みながらメールのチェックをしていると、三年後輩の水瀬爽が出社してきた。

「おはよう、水瀬くん。……どうしたの、その顔」

百八十センチはあるのではないかという長身に、アイドルのような甘めな顔立ち。営業職には多少長めな茶色の髪は、清潔感を保つようにワックスで緩めにセットされている。

いつもシャープな輪郭の横顔が、今は頬の下の方が少し赤く腫れていて小さな引っかけ傷があった。

「昨夜ちよつと。聞き分けのないやんちゃな猫にやられちゃいました」

爽は悪びれる様子もなく肩を竦^{すく}ませて笑った。

案の定な理由に、莉子は白い目を向ける。それ以上深く聞くこともなく、莉子はパソコンに視線

を戻す。彼も今は特にこれ以上話そうとはせずに、自分のデスクに腰を下ろした。

彼、水瀬爽もこの会社の創業者一族であり、現社長の息子だ。莉子の同期である水瀬蓮の従弟^{いとこ}にあたり、彼もまた水瀬帝国の王子と呼ばれている。

蓮や他の社員と同様、一年目は新人教育として現場の事務所で運営業務に携わり、二年目からはここ建築事業部の営業課に配属となった。

莉子は営業フロアの隅にある共用冷蔵庫の一番下から保冷剤をひとつ取り出し、デスクへ戻る。バッグに入れていた自分のハンカチで保冷剤をくるむと、すでに自席でパソコンを立ち上げている爽に渡した。

「ちゃんと冷やして。じゃないと、しんちゃんみたいな輪郭になるよ」

「ありがと、先輩。あの幼稚園児の奔放^{ほんぽう}さは羨ましいですよねえ。俺も莉子先輩に『オネイサーン』って甘えたいなあ」

「お尻出して『オラ天才だぞお』ってフロア駆け回ってくれるならいいよ」

「ヒドイ。慰めてくれないんですか」

四月に営業に来た彼の教育係を任せられ早半年、どういうわけかこの少しチャライ王子に懐かれている。

爽がここに配属になる前に、蓮から『悪い奴じゃないが、女癖だけは最悪だから気をつけろ』と聞いていたため、どんなボンコツ王子が来るのかと思いきや。

若干軽そうな印象はあるものの、礼儀はしっかりしているし仕事の飲み込みも早い。おまけに小

さなところまで気が利く。さらにこのルックスだ。これはモテると納得してしまったのは、爽との初対面から一ヶ月も経たないうちだったと思う。

しかし、蓮の言う『女癖だけは最悪』という言葉の意味は、莉子の想像を超えていた。「一ヶ月ってちゃんと最初に約束してたし、別れる時だって納得して別れたはずなのに。今になって騒がれちゃって」

「彼氏と別れてきたのにーって？」

「そう。別に俺が頼んだわけじゃないのに」

口を尖らせて拗ねてみせる様は、イケメンなせいか可愛く見えないこともない。けれど、言っていることは最低のクズだ。慰める価値はない。

——今は頬の傷くらいで済んでるけど、いつか刺されちゃうんじゃないかな。

そんな心配を本気でしてしまうほど、爽は恋愛の仕方に多少……いや、大いにクセがある。

彼が恋をする相手として選ぶ女の子は、みんな一様に「彼氏や片思いの相手がいる」のだ。

改めて考えてみると、クセがあるなんて言い方は可愛すぎるかもしれない。莉子から見れば大問題だし、一般論に照らし合わせてたってアウトだろう。

わざわざ、他の男性と恋愛をしている女の子をターゲットに選んでは自分に惚れさせる。そんな恋愛シミュレーションゲームみたいな真似は二次元の中だけで楽しめばいいものを、現実の世界でも悪びれずに繰り返している。どうしたらそんな恋愛観になるのか理解不能だ。

その上、振り向かせたら一ヶ月間限定という約束でお付き合いをし、その期間が過ぎたらあつさ

り別れを告げる。さすがに人妻には手を出していないらしいけれど、控えめに言ってもクズだと思ふ。この恋愛スタイルは高校生の頃から変わっていないらしく、入社してからもお相手の女の子は社内外問わない。そのせいでたちまち噂が広がり、今やこの会社で彼の恋愛観を知らない人間はほとんどいないだろう。

将来は会社を継ぐ立場にあるというのにいいのだろうかという疑問は、莉子には与り知らぬことなので黙っておく。

女性たちの方も、彼氏を振ってでも一ヶ月限定で爽と付き合いたいのか、自分だけは爽を変えられると思うのか。どちらにせよ莉子には歴代の彼女たちの気持ち（みじん）を汲み取ることはできない。

「だって俺、今は莉子先輩に夢中だし」

「へえ」

「あ、全然嬉しそうじゃない」

爽が再び悪びれずに笑う。

全くもって嬉しくないし、職場でニコニコしながらする話でもない。

飲みきったココアの紙コップを足元のゴミ箱に捨てて、彼の言葉をスルーした。

性懲りもなくこうして頬に傷を作ってくるということは、相変わらず女の子が途切れない証拠だ。キテレツな恋愛観の真偽を本人に直接聞いたわけではないけど、これだけ大きくなっている噂を否定しないで遊んでいる様子を見るに事実なのだろう。

それならば、莉子は彼の「お相手をする条件」に当てはまらない。

大学時代からずっと付き合っていた彼氏と別れたのはもう二年以上も前。それ以来、恋愛とは距離を置いて仕事一筋で走ってきた。

なぜそんな自分にちよつかいを出し始めたのかと疑問に思わなくもないが、王子の気まぐれだろうと基本放置している。

三日ほど前、急に『次は莉子先輩にします』なんて言い出した時には驚いたし頭痛もしたけれど、時折こうして冗談のような口説き文句を投げかけられる程度で特に実害はない。

そのうちこの冗談にも飽きて、彼氏とラブラブな可愛い女の子を見つけてそちらに行くだろうと思っている。

「野原^{のほち}くん、今日は午前中から出るよ」

「ちよつと、しんちゃんキャラ定着させようとするのやめてくださいよ」

「はいはい、水瀬くん。ほら、車の手配お願いね」

莉子が話を切り上げて準備しようとする、爽から思わぬ話題を振られた。

「あ、そうだ。昨日同期会だったんですね？ 蓮兄も来てました？」

「え、水瀬？ うん、来てたけど。なんで？」

「んー……ちよつと思うところがあつて。それより、蓮兄が企画に行ったとはいえ、やつぱりどっちも『水瀬』は紛らわしくないですか？ 爽でいいです」

蓮は半年前の三月までこの営業課にいたが、今年の四月に建築企画課の首都圏プロジェクト室という都市再開発事業をメインにする部署へ異動になった。

入社五年目でエリートの集まりだと言われる首都圏プロジェクト室に配属されるのは、異例中の異例だ。御曹司であるがゆえに親の七光りだなんて口さがないことを言う人もいたけれど、営業にいた三年間の彼の仕事ぶりを知れば、恥ずかしさにその口を噤^{つぐ}むしかないだろう。

去年、五十億円を超える商業施設の案件をとってきたのも蓮だし、先日は彼が携わった新規の住宅型有料老人ホーム^{しやんとしき}が竣工式を迎え、他の地域でも同じようなものを建てたいとオーナーから相談があつた。

商業施設やマンション経営などと比較して、高齢者用住宅は景気による影響が少ない上、今後有望な市場であり空室のリスクが少ない。さらに税務対策や地域社会への貢献などを含めてうまくプレゼンし、土地オーナーの信頼を勝ち得たのだ。置き土産も億単位の男が、七光りだけのはずがない。当然、莉子も蓮が実力で異動したと正しく理解しているため、営業課で開いた送別会では盛大に栄転を祝った。

そんなわけで、同じ部署に『水瀬』がふたりいるわけじゃないし、自分の中で『同期の水瀬』と『後輩の水瀬くん』で区別はできていたのだけど、爽にとっては同じ名字で他の誰かが呼ばれているのは紛らわしく感じるのだろうか。

「ん、わかった。じゃあ爽くんね」

半年も経って今さら呼び方を変えるのは若干気恥ずかしいものがあるけれど、それを出す方がおかしいな雰囲気になりそうで、なるべくあつさり呼ぶことにした。

爽も特別気にはしていないのか満足げに大きく頷いただけで、左頬に保冷剤を当てたまま片手で

資料を鞆に詰め込んでいる。

今日は朝から外回り。メールのチェックと簡単なミーティングだけ済ませてから、爽の出身大学の事務局へ打ち合わせを兼ねた営業をしに行く予定だ。

「女子寮の建て替え、取れるといいですね」

「うん。実際に見てみたけど、やっぱり結構ガタがきてたし。大きな問題はないにしても、住んでいる子たちの中には不満もあるんじゃないかな」

現在、莉子が担当しているのは都内にある私立大学の学生寮。四つあるうちのひとつの寮で漏電が原因で小規模な火災が起こり、急遽通常入札を省略して水瀬ハウスが建て替えを請け負うことになった。その間の学生たちの住居も、我が社と懇意にしている不動産会社と連携して手配済み。

他の寮は今のところ問題は起きていないとのことだが、築年数は十年も変わらない。大規模修繕工事に対応するにしても時間も費用もかかる。なんとしても残り三つの寮もすべてうちで建て替えを請け負ってくるよう、上司から直々に仰せつかっているのだ。

「確かに寮に住んでる女の子たちには不評でしたね。特に水回りが古くて最悪だった。冬場はなかなかお湯が出ないって言ってる子もいたし」

「そっか。前からそういう声は上がってたんだね」

爽は出身大学というだけあって事務局の人にも顔見知りがあるし、この寮で生活していた友人も多くいたようで、何かと営業するのに役立つ情報をたくさん持っている。おかげで頑だった事務局長が話を聞いてくれるようになった。

一応、莉子の案件の補佐という立場ではあるけど、残りの三つの建て替えを請け負えたとしたらほとんど爽の手柄だ。決して莉子ひとりの実力ではない。

—— どれだけ頑張っても、若い女性というだけで門前払いをされるケースはまだまだあるんだよね。

若干ネガティブになりかけた思考をふるい落とすように、頭を左右に振って切り替える。

男性社会が根強い建築業界だけれど、莉子の上司は女性だからと他の社員と区別せずに仕事を回してくれる。その期待を裏切りたくないし、莉子が頑張るだけ後進の女性営業が活躍しやすくなるはずだ。

ミーティングを終え、オフホワイトの大きな鞆に資料とタブレットを入れる。ちらりと爽を見ると、既に営業車のキーを手にしていて準備が整ったようだった。

「よし、行きますか」

「ほっほーい」

先ほどの某アニメキャラクターを模した声を出す爽に、思わず噴き出した。あまりにも下手すぎる。

「あはは、全然似てない」

「モノマネなんて初めてしました。もうしません。俺のキャラじゃないし」

拗ねた顔をする爽に笑いながら、営業のフロアを出てエレベーターへ向かう。

「王子はモノマネのレパトリーなんていらないもんね」

「莉子先輩はあるんですか？ レパトリー」

「聞きたい？」

「ぜひ」

「いつかね」

そんなやり取りをしながらエレベーター前に着くと、見覚えのある背中を見つけてギクリと身体に力が入った。昨夜やり取りしたくだらないメッセージと、来週の約束が頭をよぎる。

周りに誰もいなくてもビシッと伸びた背筋。均整のとれた身体にぴったりと合うスーツはきつとオーダーメイド。艶のある黒髪は短めに整えられている。

「蓮兄」

爽に呼ばれて振り返った蓮は、声の主の隣に莉子がいたことに少し険しい顔をしたけれど、すぐにポーカーフェイスに戻った。

「外回りか」

「うん、これから大学行ってくる」

蓮の質問に、意気揚々と爽が答える。

エレベーターホールの一角に水瀬帝国の王子が揃い踏みだ。社の女の子たちが見たらさぞやチャーキヤ喜ぶんだろうな、と完全に他人事でふたりを見る。

アイドルのような甘いルックスを持つ爽に比べ、蓮はキリッとした切れ長の目が印象的で、俳優として映画のポスターに載っていても何の違和感も抱かないほど整った顔立ちをしている。

身長はふたりとも同じくらいなので、水瀬家の遺伝の為せる業なのだろう。百五十五センチとい

う平均を下回る身長の莉子からすると、とても羨ましい遺伝子だ。

従兄弟同士とはいえないくらいだけれど、両者ともすこぶる顔がいい。

——どんな美形一族なんだろう。

我が社の社長と副社長の顔を思い出そうと頑張ってみたものの、ぼんやりとしか出てこない。薄情な社員だと申し訳なくなり、あとで会社のホームページを見てみようと考えていると、蓮の視線がこちらを向いていた。

「例の学生寮？」

「え？ あ、うん。そう」

蓮が企画課に異動して半年たった今も、以前と変わらずに飲み仲間だ。同期会でも、ふたりで飲みに行った時でも、主に話す内容は仕事のことが多い莉子たちは互いがどんな仕事をしているのかをある程度は把握している。

他部署の所属になってしまったため、なんでも話せるというわけではないけれど、こういう場合はどんな営業が有効かという営業術の話から、今はあの会社がこういう事業を起こそうとしているといった情報交換まで、周囲に『仕事バカ』と言わしめるほど熱いトークを居酒屋のすみっこで繰り広げていたりする。

正直、莉子には都市開発の仕事はさっぱりだけど、半年前まで営業にいた蓮は莉子が学生寮の案件を受け持っていることを知っていた。

爽と話していると思いきや自分に向かって聞いてきた蓮に戸惑いつつも、莉子はいつもの調子で

答える。

「女をナメてる頭の固いおじさん連中をメロメロに口説き落としてくるよ」

「……言い方」

ガッツポーズをする莉子を真っ直ぐに見つめる蓮が眉を顰めたのには気づかないフリをした。女性であることが、建築営業の世界では不利に働くことがあるのを蓮も知っている。その理不尽さに、莉子が何度も苦汁を嘗めさせられていることも。

だからといって、へこたれたりしない。心配させたくなくて『おじさんを口説き落としてくる』なんて茶化した言い方をするのは以前から変わらない。女の武器を使うという意味ではなく、莉子なりの営業術で契約を取るという意味だ。

『オラがおじさんたちに寮の建て替えを勧めてくるぞーお』なんちゃって

「おお！ すげえ！」

場を和ませようと飲み会でもテッパンのものまねネタを披露すると、爽が驚いた声を上げた。

「ふふふ、似てた？」

「めっちゃ似てます！」

「レパートリーお披露目第一弾でした。第二弾以降をお楽しみに」

「……何してんだお前ら」

呆れて苦笑した蓮の顔を見てほっとする。

いつからだろう。蓮が真剣な顔つきで自分を見てくるたび、落ち着かない気分になるようになって

たのは。そわそわと据わりの悪い感情に支配され、つい茶化してしまう。

——最初に違和感を覚えたのは、確か一年くらい前の飲み会の席だったつけ。

『そういえば、自転車買った？』

随分前に交わした会話を持ち出され、戸惑ったのを覚えている。

『満場一致で否決された』

『なんで』

不服そうな顔で『俺の一票はどこいった』と睨む蓮に笑っていると、彼が急に『送っていく』と言い出した。

『え？ なんで、いいよ』

『いいから。今日いつもより遅いし。ずっと気になってたんだよ、駅から家まで遠すぎだろ』

『別にそこまで遠くないよ。おにぎりとかキン食べてお茶飲み干したら着くし』

『学生じゃあるまいし、帰り道で夕食済ませてんじゃねえ。食べ歩きなんて行儀悪い』

『お母さんか』

『ズボラな娘を産んだ覚えはない。いいから送ってく』

そのあとも『いらない』『送ってく』の押し問答は続き、結局「無事に家に着いたらメッセージを送る」という謎の着地点で合意を得た。

帰宅して【家に着いたよ】と送ると、即既読がつき【了解】と短く返ってくる。

——なに、これ。

まるで付き合いたてのカップルのようなメッセージのやり取りがなんとも照れくさく、誰に見られているわけでもないのに居た堪れない。

今までそんなことはなかった。どれだけ遅くなっても『氣をつけて帰れよ』くらいだったはずなのに。

彼の中で、どんな変化があったのだろうか。

それ以来、飲み会のあとは蓮への帰宅報告のメッセージが義務付けられた。違反したらどうなるのか気になったけれど、強制的に自宅まで送られる未来が見えたため、毎回律儀にメッセージを送っている。

それが面倒だとか、嫌だとかいうわけじゃない。言外に心配してくれているのだということがひしひしと伝わってきて、とにかく落ち着かないだけだ。

蓮は同期として気取らない付き合いのできる唯一の男友達。くだらない会話をして笑って、仕事では助け合って高め合って、気が向けば一緒に飲みに行く。そんな居心地のいい関係。

彼の隣でなら、莉子は自分らしくいられる。同期とは仲間であり、ライバルでもある。愚痴や弱音を吐けるし、負けたくないからこそ張り合って頑張る活力をもらえるのだ。素直に気持ちをぶつけられる貴重な存在だからこそ、この関係を壊したくない。

心の奥底にいつの間にか芽生えていた感情は見ないフリをして、仲のいい同期としてこの距離をずっと保っていききたい。だからこそ、昨夜の同期会を抜け出してきたのだ。彼の「話」を聞いてしまったら、この関係性が壊れてしまう気がして。

そんな莉子の願望を知ってか知らでか、蓮は目を細めてこちらを見下ろした。

「レパートリー第二弾は、ひみつ道具を出すタヌキ型ロボットだろ」

『「タヌキじゃない！ 猫型ロボット！」 ちよつと、やらせないでよ」

「お前が勝手にやったんだろ」

莉子をからかって笑う蓮を見て、ふと昨夜のドヤ顔をしたパンダのスタンプを思い出した。目の前の男を見上げつつ、脇腹に軽くグーパンチをお見舞いする。

「痛って！ なんだよ」

「顔にイラつときたから」

「はあ？」

「顔にイラつときた」

「二回言わんていい」

真顔でツツコミを入れる蓮に、今度は莉子がふふつと笑みを零す。

このくらい色気のないやり取りがいい。こういう関係が心地いい。やたらと心配されたり甘い視線を向けられたりするのとは、やっぱり落ち着かない。

すると、くだらないやり取りをしているふたりに見て、爽が笑った。

「仲良いね」

「まあな」

即答してくれる蓮にくすぐったさを覚える。普段クールなくせに、こういう時に素直なのはずる

いと思う。きゅつと胸の奥が疼いた。

「同期ならどこもこんな感じじゃない？ ほら、行くよ」

緩みそうになる頬を誤魔化すように、莉子は蓮との会話を切り上げて爽を促す。ところが、やってきたエレベーターはほとんど満員でひとりしか乗れそうにない。

「蓮兄、先いいよ」

「いや、急いでないから。お前が先に行つて車回してきたら」

「じゃあそうする。莉子先輩、正面で待つててくださいね」

「うん、お願い」

爽を乗せたぎゅうぎゅうの箱が閉まり、エレベーターホールには莉子と蓮のふたりきり。

あのドヤ顔のパンダを思い出して小突いてはみたものの、メッセージの内容が内容だけにあまり話題にはしたくない。わざわざ一週間前から約束してまでしたい話とやらを、今ここで聞くわけにはいかないのだから。

先手必勝！ と、莉子は自分から仕事の話題を振った。

「今日は女子寮メインに話をしにいくんだ。今どきオートロックないのは厳しいって先方もわかってるだろうし」

「まあ、そうだろうな。老朽化も進んでるだろうし、まとめて建て替えの計画を立てた方が向こうとしても学生側にインフォメーションしやすい」

エレベーターが来るまでのたった数分。それがやけに長く思えるのは、蓮を意識してしまつてい

るせいだ。

平常心、平常心と頭の中でお経のように唱え続ける。

「佐倉のマンションは？ オートロックあるの？」

唐突に自分の部屋の話題になり、戸惑いながらも頷いた。

「うち？ うん、ついてるよ」

「ちゃんとモニター付きのやつ？」

「……そうだけど。なんで？」

駅から徒歩十五分以上かかるといふ、もはや最寄り駅とはなんぞやという立地を我慢しているだけあって、莉子の住むマンションは防犯面もしっかりしている。オートロックはモニター付きだし、エントランスにはちゃんと二十四時間録画式の防犯カメラも設置されている。

「いや、気になったから」

「なにそれ」

「防犯意識低そうだし」

「失礼な。もしオートロックがなかったとしても、ピンポンされて誰彼構わず出たりしないよ」

そう言い返したところで、ポーンと若干間拔けな音を立てて下り行きのエレベーターが到着した。先ほどとは違い、箱の中には誰もいない。

「水瀬は何階？」

「五階。朝からミーティングなんだ」

「ああ、前に言ってた埼玉のモデルタウン？」

「そう。施設誘致で意見が割れて平行線。自治体のお偉方は頭が固いからな。また長くなりそう」
うんざりした顔の蓮にクスツと笑う。莉子と違い、あまり愚痴を零すタイプじゃない彼がそう言うからには、本当にうんざりするほど長い会議になるのだろう。

「佐倉」

「ん？」

「俺だったら？」

何が『俺だったら？』なのかわからず、隣に立っている蓮を見上げる。

「俺が佐倉の部屋に行ってピンポンしたら出てくれるの？」

「へ？」

突拍子もない質問に、答えよりもまず疑問が浮かぶ。

「いや、なんで？」

「気心知れてる同期だからって部屋に上げるのか、警戒して上げないのか気になったから」
そもそも、蓮がアポなしで自宅に来るというシチュエーションがまずありえない。いや、アポがあつたらいいという意味ではないけれど。

——なにこの問題。どう答えるのが正解？

蓮がなにを考えているのかまったくわからないし、できれば、あまり深く考えたくはない。けれど、一応言葉通りに想像してみる。

——もし水瀬がうちに来たとしたら……

莉子の自宅は八畳しかない1Kの部屋。長身の蓮が家にいるだけで圧迫感がありそうだ。近すぎる距離に逃げ場がなくて、心臓が爆発してしまうに違いない。

「……上げないよ」

見上げていた視線を逸らしながら答えると、頭上からフツと笑った気配がした。

「それで正解。他の男も絶対部屋に上げるなよ」

頭をぽんぽんと軽く叩かれ、振り払うこともできずにされるがまま。

あつという間に五階に到着し、「じゃあな」と手を上げる蓮を半ば呆然としながら見送った。

——一体、今のは何だったの？

莉子はひとり取り残されたエレベーターの中で頭を抱えた。

——ただの世間話？ 防犯意識が低そうだという私に忠告？

いつかの飲み会でも、駅から家が遠いと話したら過保護な父親みたいな発言をしてたし、きっと蓮は心配性なのだろう。

——うん、きつとそう。

無理やり結論付けて何度もひとりで頷くと、仕事の頭に切り替えるために両頬をべちつと叩いた。

第二章 過去と現在

水瀬ハウス工業では、入社一年目の新入社員は皆もなく各現場の事務所で運営業務に携わり、現場を支えながら建築というものを勉強する。莉子も大学の建築科を出ているけど、入社してしばらくは学ぶことだらけで四苦八苦していた。

とはいえ仕事自体は事務的なことが多く、一年目ということであまり残業もない。

大学三年の頃から付き合っていた同年の彰人^{あきと}は、別の建築会社^{ちやうど}に就職した。フットサルサークルに所属していた彰人は爽やかで優しい雰囲気^{きふき}の持ち主で、周囲の女の子からの人気も高い。彼から告白された時はとても驚いた。

モテるはずの彼がなぜ自分なんかにも思いもしたが、『莉子と一緒にいると楽しい』と言う彼からの熱烈なアプローチに絆^{はだ}されて付き合うことになった。

入社したての彰人は、早速建築士として先輩のアシスタントをしながら設計図を引く毎日で忙しそうだったけれど、それでも平日の夜や週末にはデートをしていたし順調な付き合いだったと思う。生活が激変したのは入社二年目を迎えた頃。

莉子は営業課に配属され、一気に忙しくなった。それは任される仕事量の問題だけではなく、今

後仕事をしていく上で必要になるであろう資格の取得に追われていたためだ。

建築営業は精神的にキツく、離職率が高いと言われている。その理由のひとつは、商材が高価でなかなか成果が出ないからだ。

建物をひとつ建てるには、気が遠くなるほど多額のお金がかかる。大前提としてなかなか売れない商材を扱っているのだ。どれだけ頑張っても営業課に配属されたばかりの頃は手応えを感じられず、黙々と勉強の日々が続く。売上は明確に数字に表れるため、商談を決められなければ焦りに繋がるし、周りと比較して落ち込むこともあった。

それに加えて、莉子の場合には『若い女性』というのがネックになっている。

先輩について挨拶回りをする中で、明らかに見下した目で見てくる相手先も少なくなかった。父親よりも年上の男性には名刺すら受け取ってもらえないこともざらにあり、なんて前時代的な職種なんだと愚痴ったことも一度や二度ではない。

とはいえ、今日から『じゃあ女やめます！』と宣言してやめられるものではない。生物学上、女性であることは変えられないのだから、いつまでも愚痴っていたって仕方ない。

できることを考えた結果、莉子は少しでも相手に信頼してもらえよう仕事に関連した資格を片っ端から取得することにした。

宅建士、不動産鑑定士、ファイナンシャル・プランナー、さらに二級建築士の資格も視野に入れ、仕事を終えた後の時間は勉強に費やす。

悔しい思いをすることもあるけど、大きな建築を担う仕事はやり甲斐もあるし、携わった建物が

竣工を迎え落成式を終えた時の達成感はずっと他の仕事では得られない。地図に残り、地域の人たちに受け入れられ、街のシンボルとなっていくのを見るのはワクワクするし、それを先輩のアシスタントという形ではなく自分の力で勝ち取って味わいたい。

同じ建築営業には気の合う同期の蓮もいるし、上司や先輩たちもいい人ばかり。元来負けず嫌いな性格の莉子は、とにかくがむしゃらに努力した。

デートをするよりも、資格の勉強に時間を使いたい。この先、仕事を円滑に進めるためには今が頑張り時なのだ。若い女だからと相手に不満や不安を持たれないほどの知識を手に入れて、それを武器に戦いたい。

そうして仕事に打ち込めば打ち込むほど、彰人と会う時間は減っていく。今なら自分勝手な考えだとわかるけれど、当時の莉子はとにかく余裕がなかった。彰人も同じように忙しくしているだろうと思ひ込むことで、罪悪感から目を逸らしていたのかもしれない。

まだ残暑も厳しい九月上旬。彰人と付き合って三年目の記念日がやってきた。

この日ばかりは仕事や勉強よりも彼と過ごしたいと思ひ、サプライズで彼の部屋を訪問しようと考えた。久しぶりに会うのだし、驚いたり喜んだりする顔が見たかったのだ。

水瀬ハウスでは、水曜日はノー残業デーと決められている。ちょうど同期会の日だったけれど、運に行けない旨の伝言を頼み、定時ぴったりに退社した莉子は彰人のマンションへ向かった。

大学を卒業したのと同時に合鍵をもらっていたので、一旦彼の家へ行き、荷物を置いたら近くのスーパーで買い物をするつもりだった。

きつと疲れて帰ってくるだろうし、外食に連れ出すのも申し訳ない。ちよつと奮発して、ご馳走ちそうを作って驚かせる作戦だ。付き合って三年目の記念日を祝うのと同時に、なかなか会う時間が取れないことを謝りたい。

早く一人前になりたくて突っ走っている自覚はあるし、もう少し忙しい日が続くけれど、彰人のことは好きだし、大切に思っている。それをきちんと伝えたかった。

そんな計画を立てながら駅から彰人のマンションへ向かっている途中に、仲睦まじなかむつそうに腕を組んで歩くひと組のカップルがいた。女性が隣の男性を見上げてなにか言うのと、彼は彼女の額にキスを贈る。

見ているこちらが照れてしまうような場面に遭遇し、あんな風にいかにもラブラブな感じで外を歩いたのはいつだったかな、と考えてしまった。

最後に彰人と会った時の会話すら、すぐには思い出せない。

そんな自分を反省しながら、あまりじつと見るのも失礼だと視線を逸らそうとした瞬間、莉子は目を瞠はなつたまま固まって動けなくなってしまった。

九月第一週の夕方六時は、人違いをするほど暗くない。

何度まばたきをしてみても、カップルの男性は莉子の恋人である彰人だった。

ふたりはお互いしか見えていないのか、こちらに気づくことなく笑顔で会話をしながらマンションのエントランスへと入っていく。

彼はひとりっ子で姉妹はいないし、従兄弟は全員男性だと聞いている。そもそも家族や親戚との

距離感ではなかった。

「浮気」の二文字が脳裏をよぎる。

——その子、誰？ 今日が何の日か、覚えてないの……？

シヨックのあまり、マンシヨンのエントランスを見つめたまま呆然とその場に立ち尽くす。使い慣れない合鍵を持っていたようにと、そのまま彰人の部屋に突入する勇気は持ち合わせていなかった。くると回れ右をして、足早に来た道を引き返す。

感情をすべてシャットダウンしたような無表情で電車に乗り、会社の最寄り駅に着くと、行き慣れた居酒屋へ歩き扉を勢いよく開けた。

「あれー？ 莉子？」

「おお、佐倉来たんか」

同じように水曜はノー残業デーの会社が多いのか、チェーン店の居酒屋はとても混み合っていた。同期会は既に始まっていて、店の一番奥の座敷を陣取っている。

「お疲れ様。ごめん、飛び入り参加してもいい？」

「もちろん」

そんな会話が耳に届いたのか、テーブルの端でビールを飲んでいた蓮が驚いた顔をしてこちらを凝視してきた。

座敷に上がる前に店員にレモンサワーを頼み、おしぼりを受け取って、ひとつ空いていた蓮の横に座る。いつの間にか、こうした集まりの時は彼の隣が定位置になっていた。

すぐにやってきたレモンサワーを一気に半分ほど飲み干したところで、蓮が口を開く。

「どうした？ 今日には来ないんじゃ——」

「問題！ てーれんっ」

「……何だ、その効果音」

「今日は一体何の日でしょううか？」

「はあ？ お前もう酔ってんの？」

「チッチッチッチ、時間切れは一発芸ね。チッチッチッチ」

「なんでだよ」

面倒くさい絡み方をしている自覚はあるけれど、彰人と知らない女性の仲睦まじい姿が脳裏に焼き付いて離れない。いつものくだらないやり取りをして気を紛らわさなければ、この場で泣いてしまいそうだった。

蓮は心底嫌そうにため息をつきながらも、無意味なクイズごっこに付き合ってくれる。

「……彼氏と三年目の記念日なんだろう？ なんてこんなどこにいいの」

蓮の疑問はもともとだ。記念日だからと同期会を断り、サプライズを仕掛けようとウキウキしながら帰っていた自分が、なぜか一時間もしないでこの居酒屋の座敷に座ってレモンサワーを飲んでいる。

「謎はすべて解けてるんだよ。じっちゃんの名にかけて」

「……」

「真実は、いつもひとつ」

「混ざってる混ざってる」

「見た目も頭脳も大人なんだから、見知らぬ女の子と腕組んで部屋に入っていったら……することひとつ……」

こんなところで泣いては、蓮だって困るに決まっている。だから冗談を交えて笑って話そうと思ったのに、自分でも想像以上に声が震えてしまった。

莉子の呟きに、蓮は切れ長の目を大きく見開いてこちらを凝視する。

ひとつの真実とやらに行き着いた蓮はグッと眉間に皺を寄せ、「とりあえず飲め」と半分残っていたレモンサワーを莉子に持たせた。

多くを語らず、それでも氣遣ってくれる優しさが傷ついた心に沁みる。

ちびちびと飲みながら、先ほど見た光景と、それに対してなんのリアクションもしないで逃げ帰ってきたことをぼつぼつと話す。蓮は浮気をしたであろう彰人にかんりの嫌悪感があるのか、今からでも問い詰めるべきだと怒りを露わにした。

「なんでその場で聞かなかった？」

「だって、聞いたら全部終わっちゃうじゃん」

もしかしたらただの友達かもしれない。少し距離が近いだけで、やましい関係ではないかもしれない。そんな紙切れよりも薄い期待を捨てられない莉子に呆れているのか、蓮は苦々しい顔をしていた。

「そんなに、そのことが好きなのか」

その問いに対して、莉子はなにも答えられなかった。

彰人から告白されて始まった関係だけれど、莉子だってちゃんと彼を想っていた。そうじゃないと三年も付き合っていない。

けれど、この半年の間に顔を合わせた回数は数えるほどしかない。仕事や勉強に夢中になるあまり、彰人との時間の優先順位が低くなってしまっていたのは事実だ。付き合い始めた当初よりも気持ちが薄まっているのかもしれない。

浮気の実偽を問い詰めない理由は、果たして彼を好きだからなのだろうか。

仕事がうまくいっていない今、恋人にまで浮気されて捨てられるなんて耐えられない。そんなブライドが別れを拒んでいるのではという疑念が、頭の片隅に浮かんではいる。

それでも、そんなずるくて惨めな自分を認めたくなかった。

「もし本当に浮気されてたとしても、私にも原因があったんだよ」

「そんなわけないだろ。佐倉は必死に仕事をしてるだけだ」

「でもそのせいで彰人と会う時間を取れなかった。これからは、ちゃんと彼との時間を作る。もちろん、仕事も手を抜いたりしないから大丈夫」

そう蓮に宣言し、それからの莉子は、とにかく仕事と恋愛の両立をしようと躍起になった。

彰人の浮気疑惑には目をつぶり、これまで以上にいい彼女であろうと彼と会う時間を作り、デートをしたり家でゆっくり互いの近況を話したり、離れていた間の溝を埋めるよう努力した。

仕事も資格の勉強も疎かにはできないため、今までよりも一時間早く出社し、メールの確認や資料作成など、社内ですることができる事務作業を朝のうちにこなす。日中は外に出て打ち合わせやアフターフォローに回り、可能な限り定時に退社する。その足で彰人のマンションへ行き、手料理を振る舞ったり家事を手伝ったりと、甲斐甲斐しい彼女を演じた。帰宅後には資格の勉強が待っているため休んでいる暇はないし、取引先から呼び出されれば早朝でも土日でも飛んでいく。

振り返ってみれば、当時の莉子は見事に空回っていた。頭のどこかで『これでいいの?』と疑問を持っていたにもかかわらず、当時はなぜかそうしなくてはならないと強迫観念に駆られていたのだ。

それでも、最初の一ヶ月くらいはうまくいっていたように思う。彰人は相変わらず優しくかったし、会える頻度が増えたことを喜んでくれていた。だから努力し続けた。

莉子があの光景を見なかったことにすれば、このまま別れずにいられるかもしれない。付き合い始めた当初のように楽しく過ごせるかもしれない。

そう思っていたけれど、徐々に綻びがはじまる。

彰人と過ごす時間が、少しずつ苦痛になっていったのだ。

彼の部屋に入ると、他の女性の影がないか無意識のうちに探っている自分に気がついた。会話をしている知らない女性の名前が出るたびにどんな関係なのかと気になり、彰人に触れられるたびにこの手で別の女性に触れたのかもしれないと考えてしまう。

大学時代から、彰人は女性に人気があった。それでも浮気の心配をしたり、周囲の女の子に嫉妬

したりすることはなかった。一緒に過ごせる時間も多かったし、なにより彼を信頼していたから。

けれど彰人の浮気により、その「信頼」が崩れてしまった。会えば苦痛を感じるくせに、彼が自分の知らないコミュニティでどう過ごしているのか気になり、会う頻度を減らせない。正直に言えば、会いたくないからではなく浮気をされたいだけのために彼との時間を確保していた。

彰人との関係をよくしようと頑張れば頑張るほど莉子は追い詰められていき、心が疲弊し、それを誤魔化すために無理やり仕事を詰め込もうとする。とんでもない悪循環が生まれていた。

そんな明らかにオーバーワークだった莉子を窘めてくれたのは、いつだって蓮だった。

『これを一気にやろうとするなんて、無謀すぎるし非効率だろ。どれだけ自分を過大評価してるんだよ』

容赦ない物言いにムツとしたけれど、それが彼なりの優しさだとすぐに気づいた。それに蓮のアドバイスは的確だった。

『俺が使ってたテキスト持ってくるから、まずは宅建一本に絞れ。住宅系に行く気がないのなら、次はFPよりも不動産鑑定士の方がいいと思う』

自分だって忙しいに違いないのに、同期のよしみなのか世話焼き体質なのか、事あるごとに莉子の面倒を見てくれた。

『昼食った? まだなら社食行くぞ。そんな幽霊みたいな顔色で営業行っちゃって、取れる案件も取れなくなるぞ』

『佐倉、焦るな。武器は知識や資格だけじゃない。お前に合ったやり方が絶対見つかるから』

莉子が空回っている理由を知っている蓮だけど、一度だって『もうやめたら?』とか『とつと別れれば?』なんて否定的な言葉は言わなかった。

ただそばで見守ってくれて、暴走しようとしたら止めてくれる。まるで莉子の安全装置だ。『女だからとか、御曹司だからとか、くだらないことを言う奴の言葉なんて聞かなくていい。俺たちは自分のやるべきことをやるだけだ』

蓮は、いつも莉子が欲しい言葉をくれる。

彼の言う通り、莉子は少しずつ自分なりの営業術を確立していった。

元々、莉子は人と話すのが好きだ。初対面で撥ねつけられずに会話のきっかけさえ掴めれば、その後はお客さんと友好的な関係を築くのに時間はかからない。

莉子を『佐倉さんは女の子だし、どうせ腰掛けなんでしょ?』と時代錯誤も甚だしい価値観で見下してきたお客さん相手だって、ちゃんと向き合って対話して信頼を勝ち取れば契約を結べるのだと学んだ。

仕事や資格の勉強は、頑張れば頑張るほど自分の身になっているのがわかる。だから多少身体が辛くても続けられたし、やめたいとは思わなかった。

けれど彰人との関係は違った。

どれだけ努力していい彼女を演じようとしてもうまくいかない。彼が浮気をしたなんて信じたくなかったけれど、あの日の光景が揺るぎない事実として莉子の心を抉り続けている。

もう無理だとわかっていた。一緒にいても楽しいと思えなくなっていたのだから。

それなのに三年も付き合ってきた相手を失うのが怖くて、ずるいとわかっていながら自分から手を離せなかった。

自分のことが、どんどん嫌いになっていく。

忙しさと自己嫌悪から食欲も湧かず、夜は眠れなくなり、心も身体もボロボロになった結果、莉子は職場で倒れるという大失態を犯した。

栄養失調と過労が原因で、二時間の点滴が終われば帰れると言われたものの、職場に迷惑をかけてしまった自分が許せず、自己嫌悪でポロポロと涙が止まらなかった。意地を張るのは限界で、別れを選ぶ時がきたと働かない頭で理解した。

『よく頑張ったな』

『お前は悪くない』

『俺がそばにいるから』

病院まで付き添ってくれた蓮は、子どものように泣きじゃくる莉子の頭をずっと撫でてくれていた。

乾いた大地に水が染み渡るように、低くて優しい声が莉子の心に入り込んでくる。頭にのせられた手が大きくて温かくて、余計に泣けてしまったのを今でも鮮明に覚えている。

その後、彰人との別れは想像以上にあっさりしていた。

浮気を追及して嫌な雰囲気で終わるのは嫌だったから最後までなにも聞かなかったけれど、彼は莉子が浮気に気づいていたことを察していたように思う。

『別りたい』と伝えると、『わかった。ごめん』と辛そうに謝ってくれたから。

大切にしてもらっていたはずなのに、同じだけ大切にできなかった。彰人が他の女性に目移りしたのは、やはり自分にも原因があるのだと思う。

だから莉子は『私もごめん』と謝った。そうして、もう二度と会わないであろう彼との三年半に及ぶ交際に幕を閉じた。

散々空回り、周囲に迷惑をかけて、ようやく悟った。不器用な自分には、仕事と恋愛の両立は不可能だと。

自他ともに認める猪突猛進ちよつもうしんタイプの莉子は、ひとつのことにしか集中できない。きっと仕事に打ち込めば打ち込むほど、恋人との時間を疎かにしてしまい、相手を傷つける。それを彰人との付き合いで嫌というほど思い知った。

自分の不甲斐なさが原因だとわかっているにもかかわらず浮気をされるのは嫌だし、嫉妬で苦しくなる恋なんて二度としたくない。仕事に支障を来すなんて論外だ。

——両立できないのならば、私は迷わず仕事を選ぶ。

いつか、もう一度恋をするとしても当分先でいい。

彰人と別れてからの二年半、ずっとそう思ってきた。思ってきたはずだった。



水瀬ハウス工業の自社ビルは地下二階地上二十一階建てで、水瀬ハウスの本社はもちろん、提携する不動産会社やインテリアデザイン会社もテナントとして入居している。

一階から四階まではショールームになっており、一般にも開放されているため土日には家族連れで賑わっているようだ。

建築会社の自社ビルということで環境や省エネにも配慮された設計がなされており、何年か前に経済産業大臣賞を受賞したと、先日社長の顔写真を探すために見たホームページに掲載されていた。肝心の社長の顔はというと、爽とはあまり似ていなかった。どこにでもいそうな優しげなおじさんで、特に高身長というわけでもなくイケメンの名残りのなものも見当たらなかった。蓮の父親であり、社長の弟である副社長も同様だ。水瀬家の遺伝子というわけではなく、王子たちは母親に似ているのかもしれない。

そんなとんでもなく失礼なことを考えながら、エレベーターで社員食堂のある最上階へと向かった。水瀬ハウスの食堂はワンコインでレストランのようにおいしい食事が楽しめる、社員の間でも人気がある。お弁当を持参する時間も気力も女子力もない莉子は、会社にいる日はほぼ毎日ここでお昼ごはんを食べていた。

窓側の席に陣取り、大根おろしたつぶりのポークソテーを頬張っていると、いいにおいがぶんぶんするスパイシーカレーとサラダがのったトレイが同じテーブルに置かれた。

心臓がドキッと音を立てて弾む。顔を見なくても誰だかわかってしまうなんて、相当重症だと苦々しく感じた。

「お疲れ。珍しく遅いな」

向かいからかけられた声に、莉子は顔を上げた。

時刻は午後二時になるうとしていている。昨日から爽が風邪で休んでおり、任せていた資料を自分で作っていたら、お昼をとくに過ぎてこの時間になってしまった。それでも奇跡的にAランチが残っていて、るるるんで箸を進めていたところだ。

「お疲れ様。水瀬も今お昼？」

「誰かさんが朝からくだらないメッセージ送ってくるから、調子出なくてこんな時間になった」

蓮は右半分に盛り付けられているご飯に左側のカレールーをスプーンで掬ってかけながら、トレイの横に置いているスマホをコツコツとつついた。

昼休憩の時間をかなり過ぎているとあって、人はまばらにしかない。空いているテーブルもたくさんある。

それなのに、なぜわざわざ自分の前に座るのか。そう言ってやりたいけど、なんとなく自衛のために控えることにした。

「私、カレーは食べる分だけ混ぜる派なんだけど」

「今カレーを食べてるのは俺なんだけど」

「全部混ぜたらお皿全体が汚くなるじゃん。洗う人への思いやりだよ」

「味を均一にしたいんだよ。おいしく食べるのが作った人への思いやりだろ。皿下げる時によろしくって念じて返すし、なんなら洗うのは食洗機だろ」

「……解せない。王子のくせに」

「カレーの食べ方に王子は関係ないだろ」

ぽんぽんといったものに言い合いをしながら、なんとか平常心を保つ。

朝イチで蓮から【今日は逃げるなよ】というメッセージと、例の二頭身パンダがこっちを見て指を指しているスタンプが送られてきた。やはり、パンダはちよつとイラッとする顔をしている。

腹が立ったので【ご安心を。玉子様との約束を忘れたりはしておりません】と送ると、すぐに【誰が玉子様だ】とツツコミが返ってきた。それに対し、【あ、間違えました】と、しれっと返信してほくそ笑む。

出勤前の忙しい時間帯に、意味のないメッセージを送り合う相手なんて蓮しかない。女の子たちが王子と憧れる彼が朝からことなくだらしないメッセージを送っているなんて、世界中探しても莉子しか知らない事実だ。

【アナログで書き間違えるならともかく『たまご』って打って変換してるだろ】

【玉子と卵の違いって知ってる？】

【知るか。二度寝でもしてる】

今朝のやり取りを思い出しクスクス笑っている莉子に、蓮は怪訝な目を向けてくる。カレーを食べているだけで絵になる男も珍しい。全部混ぜて食べるのは個人的にいただけないけれど、ぐちゃぐちゃと汚くしているわけではないマナー違反でもない。これ以上は黙っておくことにした。

気持ちを切り替え、莉子は小鉢のポテトサラダをばくりと食べる。こんがり焼いたベーコンとブ

ラックペッパーが利いている大人味のポテトサラダは莉子の好物。社員食堂の全メニューの中でも五本の指に入るほどお気に入りだ。

「佐倉、タレついてる」

「え？」

粗いじやがいもと肉厚のベーコンに夢中になっていた莉子は、蓮の言葉を理解し口元を隠す間もなく、伸びてきた彼の中指が自分の口の端を拭うのを呆然と見つめていた。

その中指が彼の口元にいく段になってようやく事の次第に気づき、口にポテトサラダを詰め込んだままピシッと固まってしまう。

——油断した。

「子どもかよ」

ぺろりと指を舐めた蓮の言葉はいつものツツコミ口調なのに、その表情はお昼の社員食堂には到底相応しくないような妖艶さを孕んでいる。

頬が痛いくらい熱を帯びていくのが自分でもわかる。きつと耳まで真っ赤に違いない。

「赤い」

「なにが」

ここで頬や耳を押さえては負けなので、何食わぬ顔をして聞き返す。

「リップ。最近その色だな」

「新色買ったの。秋だから」

「へえ」

唇を噛んでやり過ごそうとしている莉子をよそに、蓮はフツと小さく笑って食事を再開する。

——な、なんてことするのよ……！

表面上は平然としていても、莉子の頭の中は大騒ぎだ。

いい年をして口の端にソースをつけていた自分も悪いけれど、それならそうと注意してくれるだけでよかったのだ。なにも直接莉子の唇を指で拭ったり、あまつさえそれを舐め取ったりなんてしなくてもいいはずなのに。

いくら気安い関係である同期だとしても、この距離感はおかしすぎる。それとも蓮にとって、このくらいのスキンシップはなんでもないことなんだろうか。他の誰かにも、今みたいな真似をするのだろうか。

そう考えた瞬間、胸の奥がチクリと痛む。

——いや、違う。真っ昼間の食堂でハレンチな真似をする水瀬に苛立っただけ。

きつと今この社食に他の女性社員がいたら、黄色い悲鳴が上がっただろう。もしかしたら数人は妊娠したと言い出すかもしれない。

莉子はこれ以上赤い顔を晒さないよう、どうでもいいことを考えながら必死に平常心を手繰り寄せ、今の一連の出来事も胸の痛みもなかったことにする。

二度とソースが口につかないように慎重にポークソテーを食べ、関東では珍しい赤だしと呼ばれるお味噌汁をずっと飲む。赤だしは濃い味付けのおかずには負けないところがいい。黙々とおいし

いご飯を食べていると、なんとなく気持ちが落ち着いてきた。

話題を変えたくて、ずっと気になっていたことを蓮に聞いてみる。

「そういえば、最近使ってるあのパンダのスタンプ、水瀬っぽくないよね」

同期のグループトークでも個人メッセージのやり取りでも、蓮は端的な文字だけで会話する印象が強い。絵文字やシンプルなスタンプさえ滅多に使わなかったのに、なぜあんなパンダを選んだのだろう。唐突にあのパンダが送られてきたら、莉子だけでなく同期や友人もさぞ戸惑ったに違いない。すると、なんでもないことのように答えが返ってきた。

「ああ、あのパンダ、似てない？ お前に」

「……は？」

——似てる？ 私が？ あの人をおちよくったような顔をしているパンダに？ どういうこと!?

「小憎たらしい顔とか、すつとぼけた表情とか」

「ちよつと？」

「ちんまりしててなんか可愛いし」

「……」

「他のやつには使ってない。お前専用」

思いがけない返答に、ぱちぱちと瞬きを繰り返す。彼の言葉を理解した瞬間、胸の奥がきゅうつと締めつけられた。

どういう意味だと詰め寄ってやるつもりだったのに。あんなとぼけた顔をしたパンダと同列にす

るなんてとわざとらしくプリプリ怒って、いつもの気安い空気にしたかったのに。

ふいに投げつけられた『可愛い』とか『お前専用』という慣れない言葉に心が^{おおげさ}大袈裟に反応し、咄^{とつ}嗟に言葉を返すことができなかった。

困る。非常に困る。こんなつもりで二頭身パンダの話題を出したわけじゃなかったのに。

こういう時、咄嗟にうまい切り返しがいっくようなひみつ道具が欲しい。冗談ではなく、切実に。それから、いちいち盛大に赤くなってしまう顔もどうかしたい。ファンデーションを厚塗りすれば顔色もわからなくなるだろうか。似てるというのなら、蓮の前ではあのとぼけた顔のパンダのお面でもかぶっていたいくらいだ。

頭の中でぐるぐると考えたまま何も言葉を発せられなかったが、蓮はさして気にしていないようでマイペースにカレーを食べ終えていた。

そして、ここからが本題だと言わんばかりに尋ねてくる。

「定時で上がれそう？」

いつも通りのポーカーフェイスでこちらを見つめている蓮だけど、その眼差しはどことなく真剣味を帯びている気がする。先ほどからバクバクと高速で脈打つ心臓に、さらなる負荷がかかったきつと今、心電図を取ったらとんでもない波形になるに違いない。

今日は約束の日。先週、しりとりで誤魔化そうとして失敗した例のアレだ。

莉子は取り澄まして頷いた。

「うん。大丈夫だと思っ」

「じゃあ十七時半にそっち迎えに行くから」

「えっ!? いいよ、いつもみたいに下で待ち合わせよう」

フラットにとんでもないことを言い出した蓮に、ブンブンと首を横に振って拒絶を示す。

「それでもしないと、お前逃げるだろ」

「逃げる、絶対逃げないから。わざわざ迎えにくるのはやめて」

「……絶対だぞ」

じろりと睨むように確認され、莉子は大きくひとつ首を縦に振る。

なんとも信用がないなと思いつつ、先週の同期会を無断で抜け出している莉子はこの件に関して強く出られない。

現に今だって、今夜の約束から逃げられるものなら逃げたいと思っている。それはきつと蓮にも伝わっていて、だからこそこうして念を押しているのだろう。

蓮は莉子が情けない顔で頷いたのを確認してから、トレイを持って席を立った。

「悪い、先に行く」

さっき来たばかりだというのに慌ただし。携わっているモデルタウンの案件が忙しいのだろう。今度は自然に笑って頷いた。

「うん、午後も頑張つて。ちゃんと『お皿汚してごめんなさい』って念じて返すんだよ」

「洗うのは食洗機だけだな」

蓮はふつと柔らかい表情で笑うと、そのまま長い足で歩いて去っていく。その後ろ姿を見送りな

がら、莉子は小さくため息をついた。

——なんか、緊張した。今も心臓が変な音してる気がする……

【マジで話があるんだけど】

先週、蓮はそうメッセージで送ってきた。

もしも莉子の考えている通りの話ならば、できれば聞きたくない。頼りになる同期として、気の置けない男友達として、蓮はずっと一緒にいたい相手なのだ。

——だからどうか、私が思っているような話じゃないといい。単なる私の自意識過剰だといい。そう願っている莉子の頭の中で、二頭身パンダがドヤ顔で笑っていた。

第三章 勘違いじゃないらしい

来週訪問予定の営業先へ持っていく資料をあらかじめ作り終え、時計を見るとあと数分で定時の十七時半を迎えようというところ。周りを見渡せば、水曜日ということでも既に帰り支度を始めている人も少なくない。

約束の時間だ。逃げないと言ってしまったからには行かなくてはならない。

……隕石でも降ってこないかな。

莉子は窓の外に広がる空を見ながらため息をついた。

蓮とふたりで仕事帰りに食事に行くなんて、これまで何十回もあった。それは莉子にとってとても楽しい時間で、ノー残業デーである水曜日を毎週楽しみにしていたくらいだ。

だから一緒に食事をするのが嫌なわけでも、ふたりきりが嫌なわけでもない。飾らずに自然体の自分でいられるから一緒にいても疲れないし、どんなボケにもツツコンでくれる蓮と話しているのは楽しい。仕事に対するストイックさは自分と通じるものがあって、立場に甘んじずに努力を続けている彼を尊敬しているし、居酒屋の片隅でする丁々発止の建築議論も気持ちいい。

ただ、聞きたくない話があるだけ。

蓮は、莉子がその話題から逃げているのを察しながら、まるで猫がねずみを追い詰めるようにじわじわと問合いを詰めてくる。その追いかっこは半年前ほどから激戦を極めており、いよいよ莉子は袋のねずみだ。

蓮と初めて会ったのは入社式。隣に座った男性と互いに自己紹介をすると、彼こそが『水瀬帝国の王子』だった。

彼は参加していなかったけれど、インターンシップでは副社長の息子が同期になるらしいと噂になっていた。グループワークで『建築と街づくり』について話し合う中、水瀬帝国の王子、というワードが何度も出てきて、有名大学の建築科に在籍していて成績はトップだとか、とんでもないイケメンらしいとか、本人不在にもかかわらず話題は尽きなかった。

創業者一族とはいえ、一社員として入社するため試験や面接を受けているというのも好感が持てる。水瀬ハウス工業は学生の間でも人気の就職先で、内定競争倍率はかなり高い。その戦いを勝ち抜いて同期となったのだと思うと、むくむくと仲間意識が芽生えた。

『ああ、噂の水瀬帝国の王子！ 蓮って、いちれんたくしやう蓮托生、の蓮？ いい名前だね』

何度も噂を耳にしていたせいか、「はじめまして」よりも「ようやくお会いできましたね」という旧知の仲のような心境だった。蓮を御曹司として遠巻きに見ていた同期とは違い、初対面にしては馴れ馴れしすぎる態度で話しかけてしまったのは今や黒歴史だ。

彼はかなり引いていたと思う。切れ長の大きな目でじっと見つめられたのは、怒っていたのか呆